生のさ中に

小川国夫

角川文庫

角川文庫

生のさ中に

昭和四十七年二月十日　初版発行
昭和五十一年一月三十日　六版発行

定価は、カバーに明記してあります

著作者　小川国夫
発行者　角川春樹
印刷者　多田基
東京都新宿区改代町二十三

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京一九五二〇八
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

printed in Japan　多田印刷・多摩文庫

0193-131102-0946(1)

生のさ中に

小川国夫

角川文庫

目次

里にしあれば　五
物と心　九
役者たち　一二
巨人伝説　一六
再臨派　一六
相良油田　二六
解らない道具　二八
コートにて　二九
高砂族　三四
三月　三七
爽かな辻　三七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

平地の匂い　八一
海峡と火山　八七
修道士の墓地　九九
エンペドクレスの港　一二六
警備隊のいる町　一三五
スパルタ　一四七
施療病室　一六四
軍　艦　一七四
ヴァランスまで　一八〇
ゲラサ人の岸　一九五
旅の痕跡　二二五
アポロナスにて　二二七
後　記　二三三
《生のさ中に》の想い出　二三六
解　説　月村敏行　二三八

里にしあれば

浩が母の実家へ行くのは、絵を描きに行くようなものだった。彼は三つ年上の叔父と、画用紙を並べて描いた。

その日二人が模写したのは、戦争の絵で、満州の野を、緑の肩章をつけた騎兵が走って行く図柄だった。それは草の一本一本にまで克明に陰影をかき込み、写真とも違う、現実感を追求し過ぎて、かえって、非現実的になってしまった絵だった。

浩は自分が叔父よりうまい筈はないと思い込んでいたが、出来上った二人の絵を叔母に見せると、浩の方が上手だといった。

――恭平の馬は、なに、それは、カンガルーかいや、と彼女は恭平の絵をけなした。その地方の訛には、浩には囃す調子が感じられた。弟をいじめつける姉のそんな口調が、彼には快かった。

彼女の批評に、浩は半信半疑だった。しかし彼女は断定的だったし、叔父はショックを受けたことを隠そうともせず、萎れてしまった。浩があやふやな気持でいるうちに、周囲の情勢が変っ

て来た。そして、いつか彼も変化に融け込み、叔父の上席に坐った気分になっていた。その日のうちに、

――描いとくっせ、といいながら、恭平は紙とクレヨンを浩の手もとへ持って来て、頼むようになったし、浩は黙って頷いて、引き受けていた。

その日は稀な雪が降っていて、軒下を縁取った黒い地面が、深い影のように見えた。二人は板の間で絵描きをしていたのだ。夕方になっても、雪明りの中で描き続けていた。馬の腰から後脚の辺が、浩にはどうも腑に落ちるように摑めなかった。彼は絵本の一頁をガラスに透かし、その上に紙を当てて、なぞっていた。以前なら、叔父の絵本を、こんなふうには扱えなかった。その時はすでに、彼は恭平の気持を無視していたのだった。恭平は浩の手の動きを見守っていた。身動きせず、つっかえそうに息をしているだけだった。そのうちにゴトンと音がした。床の間に置いてある、銅の羅漢を転がしたような音だった。浩が、本と絵をガラスに押しつけたまま、振り返ると、恭平が縁側に倒れていた。後頭部と踵で、ドドドドと板を叩いていた。眼の中の無垢な白さが、白っぽい明るさの中で光っていた。

――この子は大病しているんだで、気をつけてやらにゃおえんてね。今日は、そりゃあ冷えていますでの、とかけつけた村の医者はいった。

――体の具合ってものが、脳に伝わるでしょうで、と祖母はいった。

――普通の人間とおんなじだや。自分がして欲しいように、恭平ちゃまにもしてやらにゃおえんてね。

恭平の発作が落ち着くと浩は一人で十畳の縁側へ行って、描いた絵や本や道具を片づけた。濃い線描きの馬の顔がいやに切実だった。ガラスの外では、雪の洲が少しずついざって、縁先へ近づいているようだった。それは冷たく、しかし優しい光だった。縁側だけは、いつまでも屋内の宵闇から取り残されていた。

あの頃から、恭平の病気の痕跡は、時をおいては、彼に摑みかかるようになった。きわ立って敏捷な男の子だった彼は、その敏捷さからも見放されて行った。

あの時から三年半経って、五月半ば、彼は近所の川のほとりで死んでしまった。方言でテンモクというものを、両手に一つずつかかげ持って、雑魚(ざこ)をとりに未明に家を出たが、川へ行く途中の溜り水に顔を漬けて、死んでいた。大事なテンモクを二つとも割って、晴れ上った日だったというから、地を這う橙色の光の中で、こと切れたのだろう。

――おじいちゃまが、見兼ねて、早くこっちへ来っせっていっただに、と浩の祖母はいっていた。

葬式の時、浩には叔母が目立った。彼女のセーラー服の襟の奥には、娘のしつっこい匂いがこもり始めているようだった。叔父と叔母には死と生との対照があった。彼女は兄弟姉妹が集った

ことを喜んで、いそいそとしている所もあった。

十畳の縁側から見ると、あっちこっちに楠の葉が湧き上っていた。雲一つない静かな日だった。身内だけがひっそりと、藻にたかる魚のように、顔を合わせ、気持を一致させたような小さな葬式だった。死者の贈物のような集りだった。

その葬式の時、浩が思い出したのは、彼が五つ六つの頃、蚕の家の話をひとに聞かせたことだった。蚕が桑を食べている音が四六時中雨のようにしている家が、高い石垣の上にあって、そこが自分の本当の家なのだ、という作り話だった。家でも幼稚園でも、浩はそのことを無闇に話し、大勢に信じさせた。彼の弟も信じていた。叔母も姉も兄も信じ勾配だった。彼が完全に暗示にかかっていたから、周囲に信じさせることが出来たのだろう。

葬式の時浩の心に懸ったことは、その話を恭平が信じて、真剣に聞き入っていたことだ。浩は恭平に、蚕の家へ連れてってやる、と約束した。自分でも、そこへ恭平と一緒に行く様子を頭に描いた。すると想像の中の恭平のひたむきな歩き方が、浩の確信を裏付けるということになった。こうして浩は、信じるということはひとに伝染させることによって、逆に自分に濃く伝染して来る性質を、漠然と知った筈だった。とにかく、蚕の家の話を信じたきりになったのは、恭平一人だった。

物と心

兄の宗一と一緒に、浩は駅の貨車積みのホームへ行き、鉄のスクラップの山をあさって、一本ずつ古い小刀を拾った。二本とも錆び切っていたので、家へ戻って、二人は砥石を並べてわれを忘れてといだ。時々刃に水を掛けて指で拭い、とげた具合を見るのが楽しみだった。浩の小刀はよく光り、刃先へ向って傾斜している面には、唇が映った。宗一の小刀は、その面の縁だけが環状に光っていて、中央には錆びたままの、窪んだ部分を残していた。

浩は、自分は丸刃にしてしまったが、兄さんは平にといだ、と思った。浩は自分が時間を浪費して、しかも、とりかえしがつかないことをしてしまったように思い、周到だった兄を羨んだ。浩は心の動揺を隠そうとして、黙ってまた砥石に向った。横にいる宗一が意識されてならなかった。彼が横にいるだけで浩は牽制されてしまい、自然と負けて行くように思えた。しかし浩は並んでといだ。宗一がどんな風にとぐか気になったからだ。宗一はやっていることに耽っていた。浩は自分も耽っているように見せかけた。浩には時間が長く感じられた。自分がひとをこんな思いにさせることがあるのだろうか、と彼は思った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

浩は自分の小刀で掌を切って、宗一に見せるようにした。宗一はそれに気づき、眼を上げて浩を見た。浩は自分から宗一の視線の前へ出て行った気がした。宗一を騙した自信はなかった。宗一はといでいた小刀を浩に差し出して、

——これをやらあ、といった。そして今まで浩がといでいた小刀を、とぎ始めた。

——怪我はどうしっか、と浩は聞いた。彼はもう嘘の後始末の仕方を、宗一に求めている気持になっていた。

——怪我か、ポンプで洗って、手拭で圧えていよ、と宗一はいった。

——……。

——お前んのも切れるようにしてやるんて、痛くても我慢して待っていよ。

浩はポンプを片手で押して、傷に水を掛けた。血は次から次へと出て来て、水に混ってコンクリートの枠の中へ落ち、彼に魚屋の流し場を思わせた。彼はその流れ具合を見て、これが僕の気持だ、どうしたら兄さんのように緊った気持になれるだろう、と思った。宗一は巧みに力を籠めてといでいた。浩はその砥石が、規則正しく前後に揺れているのを見守っていた。全てが宗一に調子を合わせて進んでいた。

役者たち

六一は祖母について行って、しょっちゅう芝居を見た。彼の祖母というのは、家族からのけものにされていて、町の芝居小屋で、モギリやお茶汲みや下足番をやっていた。他にもそういうことをしている人が二、三人いて、持ち場を廻していた。だから六一が一人で小屋へ行くと、祖母が木戸にいないこともあったが、だれがいても彼は通してもらえた。

昼間、六一は役者の寝泊りしている所へもよく行った。それは小屋に附属した二間続きの粗末な家で、役者たちは枕を並べて寝なければならなかった。桑畑がそのまま庭になっていた。そこで彼らがおそい朝食を食べている所を、浩も六一に連れて行ってもらって、見たことがあった。彼らの飯はうまそうだった。輝くように白くて、田舎では贅沢な感じさえした。しかし、お椀の数が足りなかったので、味噌汁をめしにかけて食べている人もいた。そのうちに、桑畑の向うをカーヴして走っている軽便のデッキから、畔道へ身軽に跳び下りた男があった。浩はそれを見て、いい恰好だと感心し、役者だからそんなことが出来る、と思った。その人は国鉄の駅の近辺へ行って、お椀としらす干しを買って来たのだった。

彼らの生活はくだけた感じだった。家族とも、友達同士とも違っていた。浩には彼らの辛さは解らなかったから、そんな自由な感じだけが羨ましかった。

六一は、ゆうべ血を吐いた浪人はこの人とか、鳥追いのおせんはあの人で、本当は男だとかいって、当てて見せた。浩は解ったような解らないような気持だった。はっきり解ったのは、乃木大将という言葉ぐらいなものだった。いずれにしても、浩は無性に芝居が見たい気がした。それに役者たちは感じがよかった。愛想よく、遠慮っぽくて、二人をからかうようなことはなかった。浩は、この人たちはもっと威張って普通なのに、謙遜なのだ、と思った。

或る晩、浩は六一と一緒に芝居を見て、翌朝また二人で彼らの宿舎へ行った。すると、劇中では極悪な婆さんだった人が、座長の細君で、優しく二人に煎餅を塵紙に包んでくれた。娘役で舞台では花形だった人が、束髪にして、地味な染め絣を着て、衣裳の整理をかいがいしくやっていた。彼女は小声で歌をうたっていた。それは前夜の幕あいに、レコードで流していた歌だった。だから彼女が朝ひっそりとうたっているのが、体の中に残っている余韻の感じで、いかにも芝居の翌朝らしかった。浩には歌詞は全部おぼえられなかったが、観音参りに帯とけて、とけて結んだ恋心、という文句だけはおぼえた。そこはいい調子だったし、彼女が自分の身の上を歌っているようにも、浩には聞えたからだった。

浩が立っていたのは、羊歯川の川原のようだった。堤の上には、大ようにも緻密にも見える雲の渚が、海の方まで続いていた。足もとには、あまり勢のよくない草が一面に生えていて、所々に猫柳が見えた。大きな茶色のバッタがキリキリいいながら、あっちこっちで舞っていた。彼は捉えることが出来るとも思わないで、バッタを追い掛けた。バッタが間近に止っていることもあったが、近づこうと思うと、浩の気持の動きに符牒を合わせたように、光が透ける内翅を見せて舞い立った。彼はバッタをほしくはなかったし、散漫な自分の気持を淋しく感じていた。そのうちに、若い女の人に行き合った。その人の着物の黒地には、火のように赤い矢の模様がついていた。

——たくさんいても、一匹もおさえられないのね、と彼女は笑いながら声をかけた。そして浩が黙っていると、

——ねえ、ボク……、とからかうようにいった。彼女の背後にはバッタが一面に舞っていて、木の車が軋むような音が、ひっきりなしにしていた。彼女は着物はいいものを着ていたが、戸外を長く歩いたせいか、髪は乾いて大分ほつれていたし、肌にも潤いがなかった。芝居で見た女の人だ、と浩は気づいた。そして、宿舎にいた時の恰好でいればいいのに、と思った。しかも芝居の中に、彼女がこうして立っている場面があったように、浩には思えた。

——これは芝居じゃないら……、と彼は、唐突とも思わないで、たずねた。彼女も、別に唐突

とは思わなかったようだった。

――お芝居って……。ボク、お芝居やるの……、とじらす感じで聞き返した。

――僕はやらんけん、お姉さんは芝居の人だら……。

――そうだわよ。

――僕らは今芝居やってるんじゃあないら……。

――お芝居やってるのかって……。

――……。

浩は彼女の表情を見守っていたが、失望した。自分は考えもなしに、まずく質問してしまったと思った。

――あなたが若い衆で……。

――……。

――バッタが鳴くお芝居なんかあるかしら。

――……。

――わたしたち、お芝居やってるんじゃないわ。

彼女はいった。浩は簡単にその答えを聞いてしまったのが、惜しいような気がした。彼は後悔していたのだ。その答えは最初から決っていたのではなくて、いわば、自分がサイコロを下手に

振ってしまったようなことで、やり直せば別の数が出るような気がした。浩は半ばバッタの音に耳を澄ましながら、考え込んでいた。

――お芝居じゃないわよ。一人もお客さんがいないじゃない。

――芝居のように思えるけん。

――ふふふ、面白いことをいう子ね。ボク、お芝居の若い衆みたいに、わたしにしたいの……。

――……。

――お芝居は夜よ。……見に来てくれる……。

――家の人が悪いっていうもん。

――でも、小屋へ来たことがあるんでしょ。

――……。

――ないしょで来ればいい。

――……。

――面白いわよ。

――……。

――どうしたの、ボク……、と彼女は体をかがめ、浩の顔を覗き込んで笑った。

――……。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com